

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 林 正之

東北古代の「蝦夷」とはなにかということに関しては、これまで種々の議論が重ねられてきたが、「蝦夷」対古代国家と二項対立的にとらえる傾向があった。これに対して林氏は、関東甲信越地方や東北地方南部など、畿内地方と東北地方北部の中間に位置する地帯の分析が必要なことを主張する。その課題に応えるには各地域に普遍的に広がる考古学的な資料の分析が有効だとして、林氏は6世紀末～11世紀の墓制と集落と鉄器の分析をおこなった。いずれも生活に密着した事象であることから、地域間の比較によって集団の動態やその変化を実生活のレベルで追跡することが可能であり、適切な選択といえよう。

墓制では、6世紀末～8世紀に東北地方北部で営まれたいわゆる「末期古墳」を分析した。末期古墳は土坑系と礫槨系にわかれるが、埋葬主体部の構造、遺体の頭位方向、副葬品などさまざまな要素を他地域の墓制と比較検討した。集落の分析では、竪穴住居のカマドの位置や煙道・芯材などの構造に着目して、地域集団の動きを追った。鉄器は鉄製鍬先をとりあげ、細部の形態に着目してあらたな分類をおこない、地域間の差異や変化をたどった。

分析の結果、土坑系末期古墳は常総地方中央部の、礫槨系末期古墳は関東地方西部～北西部の集団の直接的な関与によって成立したものであり、それが人の移動による結果であるとする。その背景に、馬産や琥珀採掘の新天地を想定したのも、具体的な資料に基づく説得力の高い見解といつてよい。竪穴住居の諸要素の分析により、6世紀後半以降の関東甲信越地方・東北地方南部に太平洋側系住居と日本海側系住居の2つの系譜が存在し、7～8世紀の両系譜の併存を経て日本海側系住居が米代川流域と津軽・青森平野に拡大し、9世紀後半～10世紀前半にそれが太平洋側に進出して、10世紀後半～11世紀には東北地方北部全体に浸透する現象を指摘した。東北地方北部太平洋側で、古墳時代後期の関東地方・東北地方南部の系譜を引く独自性の強い規格の鉄製鍬先が発生し、9世紀後半以降の鉄生産の飛躍的な進展とともに東北地方北部全域に普及するという分析結果も、墓制や住居の動向と矛盾がない。

林氏は、六国史などの文献にもとづいて7～10世紀の東北地方北部の歴史動向を整理し、考古資料の分析結果と照合した。たとえば9世紀の征夷將軍文屋綿麻呂や出羽守大伴今人らの活動と、この時期における北海道域を含む日本海側系集団の勢力の拡大を結び付けて理解するなど、国家によって捉え得ない人々の動向を考古資料により読みとっている。

以上、林氏の論文は、文献史学では触れられることが少なかった東北地方北部と畿内地方の中間地帯における考古資料を丹念に集成して分析することにより、細かな地域間関係に移住などによる交通関係や特産品の希求など人々を動かしていた要因にまで論究しつつ叙述した点に意義がある。考古資料と文献資料との整合関係の追跡などに課題を残すものの、本委員会は本論文が博士(文学)の学位を授けるのに十分な水準にあると判断した。